

【霧隠れ三郎太 “霞の術”】

作…永妻 晃

舞台中央に二人の男女が立つ。

霧隠三郎太きりかくれさぶろうた（〇〇歳）と歳若き娘、小袖こそで（〇〇歳）である。

小袖「えい！」

小袖、拳こぶしを三郎太に突き出す。

三郎太「ぬッ」

その拳を素早くひねり小袖を突き放す。

小袖、身ひらがえを翻すや、十字手裏剣を投げ打つ。

三郎太、十字手裏剣をすべてかわす。

三郎太「小袖、しかと相手を見据えて十字手裏剣を撃うて」

小袖、急に身体を萎なえ、

「……あああ〜」

三郎太「どうした!?!」

小袖「小袖はもう疲れ果てました」

三郎太「何だ、そのザマは！ 小袖ッ、お前は常々日本一の女忍者“くのー”に成りたいと申しておったではないか！ これしきの修行で根を上げるとは情けない！ 陽の出から陽が落ちるまで、サンライズ・サンセット、日々修行じゃ！ 訓練じゃ！ 勉強じゃ！ その努力をせぬ者を『怠いけ者』と呼ぶ。怠いけ者は“忍にんび”にあらず。この“伊賀いの郷さと”から立ち去り、仲間の待つ、上野動物園の檻の中で暮らせ！」

小袖「上野動物園のなまなまけもの?」

三郎太「そうじゃ、あの者たちはすべて忍者失格の成れの果てだ！」

三郎太、一瞬なまけもの真似、

「あ〜」

小袖「知りませんでした。本当ですか?」

三郎太「ま、今のは見なかったこと事、聞かなかった事として忘れろ」  
小袖「なんだ、「冗談」

三郎太「さ、修行は続く、どこまでも……参れ！」

小袖、黙して塑像のように動かなくなる。

三郎太「……どうした小袖！」

小袖、ニガイ葉でも呑んだような顔になり、

「ッ！」

三郎太『『ッ』!?!』

小袖「はい。小袖、今朝日の出より、韋駄天の如くけもの道を走り、

山をよじ、川を下り、仕掛け谷を渡り、磯沼にては水遁の術水蜘蛛

の術に、今また休む暇の無く剣術、手裏剣の稽古……」

三郎太「修行が苦と申すか！」

小袖「いえ！」

三郎太「ならば、何故わしに立ち向かわん、臆したか！」

小袖「……ッ！」

三郎太「だから何だ『ッ』とは？」

小袖「ッ、ッ！」

三郎太『『ッ、ッ』!?!』

小袖「(痛そうに) ツッ、タ……」

三郎太「なに？」

小袖「ツツタの」

三郎太「ああ？」

小袖「足が攣つたのよ！」

三郎太「あくあ、『攣つたの』。(怒る) 小袖ッ、お前の願いは！」

小袖「わが母美佐江に負けぬ “くのー” に成る事」

三郎太「出来るかな？」

小袖「必ず、わたしには幼い頃から心に誓った悲願が！」

三郎太「その腕では……母の仇を討つことは出来ん！」

小袖「いつの日にか……」

三郎太「まあよいわ……足を見せてみる……變った足はな」

と、小袖の前に屈む、

小袖「隙あり、えーい!!」

と、三郎太の脳天に懐に隠したあつた薪を振り下ろす。

が、三郎太……、

「ほい、ほい、ほい」

三郎太、小袖の薪を難なくかわし、

「小袖、その手は喰わぬぞ」

小袖「……さすが、忍び頭の右腕と言われた三郎太」

三郎太「おい、いくら幼馴染とはいえ『三郎太』はないだろう。今は、

お前に忍びの手ほどきをしている俺だ、三郎太さまと言わぬか」

小袖『「さま」？ お前をか？』

三郎太『「お前」ではない、先生じや、いや、お師匠さまと呼びなさい

な」

小袖「お塩さま」

三郎太「塩ではない！ 塩分控えめ」

小袖「和尚さま」

三郎太「なに？」

小袖「山寺の……」

二人「オショサンは、ゴーン！」

三郎太「もうよい！ 今日はこちらまで、終わり、礼！」

と、立ち去ろうとする。

小袖「待って、お師匠さま！」

三郎太、にっこりと振り返り、

「……（優しく）何だ？」

小袖「お師匠さまの“霧隠れの術”お見せ下さるなら、小袖、死

に物狂いで頑張りまする」

三郎太「……」

小袖「甘ったるく おねがい〜」

三郎太「その甘ったるい言い方はよせ！」

小袖、威を正し、

「お師匠さまの秘術ひじゆつ“霧隠れ霞かすみの術”、お見せ下され！ 小袖、一生のお願いでござる。さすればどのような苦行にも耐えてみせまする！」

三郎太「……」

小袖、合掌して丁寧に頭を下げ、

「この通りです。天地神明に誓って！」

三郎太「……その言葉に嘘、偽いつわりはないな！」

小袖「この小袖……『くの一忍者』のはしくれ、山寺の和尚さんに……

……

三郎太「なにッ？」

小袖「いえ、天地よろずの神に誓って！」

三郎太「よし、承知。“霞かすみの術”見せて進しんぜよう！ 確しかと見てお

け!!」

小袖「はッ！」

三郎太「(かるやかに)『三郎太、懐より“霞かすみの玉”を取り出すと

ボン！ と床に叩きつけるや否いなや、一瞬にして、辺り一面、雲の

ごとく霧きりがかかり……三郎太の姿はポーッと見えなくなる』」

小袖「それ、台本の『卜書うらなき』じゃないですか？」

三郎太「予算の関係じゃ、許せ！ ポーッ」

三郎太、両手を広げ自分が霞の中に消えて行く仕草。

小袖「……これは、何としたことか、お師匠さまのお姿が？」

三郎太、あちらこちらと動き回り、小袖に声を掛ける。

三郎太『これ、小袖』

小袖「はいッ(と、きよろよろ)」

三郎太「小袖！」

小袖 目を丸くして辺りを窺う。

三郎太『どうだ、“霞の術”』

小袖「驚きました!」

三郎太『わたしが見えるか?』

小袖「見えませぬ……どこにおいでか?」

と、言いながらも三郎太を確り見据え、動き回る三郎太を追う。

三郎太『ちよつと待てー! 何かわたしが見えてる様だぞ』

小袖「いえ、決して見えてはおりませぬ」

小袖、三郎太から視線をそらせ。

小袖「お師匠さま何処いずこに?」

三郎太「わざとらしい奴じゃ」

小袖「本当です。お師匠さまの声はすれど……」

三郎太『ならばよし! このまま修行を続ける』

小袖「はい!」

三郎太、床から取りあげた木刀（紙製）をふあふあと泳がす様にして小袖に手渡す。

小袖「何と不思議、木太刀（木刀が）が宙を舞って?」

三郎太「それ」

と、木刀を小袖に渡す。

三郎太「よいか、その木太刀で、（木刀）、わたしを打ち据すえられるか……ほれ、こちらだ!」

三郎太、動き回り小袖に声をかける。

小袖、三郎太の声を目掛けて木刀を打ち降ろすが、そのたびに木刀は空を斬る。

その時、外で物音。

三郎太『気の抜けた感じで』な〜んだ、あの音は?』

三郎太の意識が外の物音にとらわれた時、

小袖「メーン!」

小袖の木刀が三郎太の脳天に打ち降ろされる。

三郎太『ウヌッ、フヌフヌフヌフヌ……フヌ！』

三郎太、昏倒。

同時に、外より三人の忍者が飛び込んで来る。

小袖「何奴！」

一人の忍者……、

「えい！」

間、髪を容れず小袖のひ腹を突く。

小袖「ウッ」

気絶する、小袖。

忍者A、B、小袖を倒した忍者に、

「お頭！」

お頭「うん、上手くいったの……（辺りを見まわし、部屋の外などを

探り）どうやら霧隠れはいない様じゃ。ここはワシが、お前たち

は奥を探せ！」

A、B 「はッ」

二人の忍者、別の部屋へ走り行く。

お頭、部屋の中の箆笥や小物入れ（無対象）などの中を

探っている。

お頭「うん、ここでもない……ここでもない……一体どこに隠してあ

るのじゃ」

気絶している、三郎太が朦朧とした声を放つ、

『……あ、あ、頭が痛い、いったい何があつたのだろう。ね。』

お頭「何だッ、今の声は？」

お頭、辺りを窺がうが、

「誰もいない……空耳か？」

二人の忍者、壺を抱え走り込んで来る。

お頭「おう、どうだった？」

忍者A「どこにも見当たりません」

三郎太『……(きつぱりと) 秘密だもん!』

忍者B「おやッ、誰か居るのでは?」

お頭「いや、空耳じゃ。苦しゅうない、苦しゅうない、我ら日々多忙を極め、疲労困憊、げんなり病にて、度々空耳、幻聴なるものを来すのじゃ。苦しゅうない、苦しゅうない」

三郎太『毎日、大変だもんな』

忍者A「今のが?」

お頭「苦しゅうない、苦しゅうない」

忍者A「疲れか? (Bに) 先ごろな、あれだけ好きだった兎の肉が鼻についての、食べる気にならんのだ」

忍者B「おお、わしもなあれだけ好きじゃった……あれ?」

忍者A「どうした、何があれば好きじゃったのだ?」

忍者B「おお、(思い出そうと) あれだけ好きじゃった……あれだけ好きだった……お頭」

お頭「何じゃ?」

忍者B「おれの好物何でしたっけ?」

お頭「(とどくとく真剣に) さあな、甘いもんか辛いもんか?」

忍者B「(しっかりと真剣に) あまいもの? からいもの?」

忍者A『あ』の付くものか『や』の付くものか?」

忍者B「何だそりゃ」

忍者A「意味はない」

忍者B「意味がないもの?」

三人「うゝん」

と、考える。

お頭、忍者Bの抱えている壺を見て、

「ところで、何だその壺は?」

忍者A「水桶の陰に……隠す様に……」

お頭『隠す様に』……あやしい……で、中身は?」

忍者A「はい、何か入っている様な? ……」

お頭「なんだ、調べてないのか？」

忍者B「仕掛けでもしてありましたら、と思いついて」

お頭『仕掛け』？ おい、(Aに)安兵衛、お前手を入れてみる」

忍者A「わたくしが、ですか？」

お頭「嫌か？」

忍者A「はい！」

お頭「嫌なものを無理強いはせぬ。それがワシの性格だ。(Bに)おい、太郎丸」

忍者B「わたくしも怖いです。忍びの天才と言われている、霧隠れで

す。どの様な仕掛けが……手首がちよん切れるやも」

お頭『手首がちよん切れる』？ (舌打ちをして、胸を張って)意

気地のない奴めが、『手首がちよん切れる』か『ちよん切れぬか』

試す度胸もないのか！」

忍者B「では、まずはお頭が……」

お頭「おお、お前たちはワシの性格知ってるようだな」

忍者A「ええ、頼まれたら『イヤ』と言えない質です」

お頭「そう、『イヤ』と言えない質だ。(ニツコリ)生まれつきだ！」

忍者B「確か遺伝とか？」

お頭「ああ、爺ちゃん譲りだ！」

忍者A、B「お頭……お願い致します！」

お頭「(明るく)あいよ！」

と、ためらわずに壺に手を入れる。

忍者A「お頭、何かありますか？」

お頭、壺の中を漁っている。

お頭「何か……あるぞ？ あ、これは何だ？」

忍者B「何です!?!」

お頭「……何か……ヌルっとするな？」

忍者A「嫌だな、出さないで下さいよ」

お頭「おお、これは!?!」







忍者B 「お頭の匂いじゃねえ」

お頭 「……(重々しく) ちよっと、聞いていいかい？」

忍者A 「お頭の匂いはどんなかってことですか？」

お頭 「さっしがいいな」

忍者A 「(Bに) お前が言えよ」

忍者B 「お前が言ってくれよ」

お頭 「よし、聞かんでもいい、さっしはつくぜ……」

と、自分の匂いを嗅ぐが……。

お頭 「自分じゃ解らねえもんな……うん、来るぜ、支度しろ！」

忍者A、B、抜刀！

小袖 「……(もぐもぐと叫ぶ、以下猿轡内の声) 『三郎太様、来ちや

駄目。わたしの命より使命を果たして下さい』」

お頭 「何ッ、『三郎太様、来ちや駄目。わたしの命より使命を果たし

て下さい』だ」と

忍者A 「お頭、よく分かりますね」

お頭 「ま、まあな(台本を読んで知っているような意味合い)、そん

なところだろうと思つてな！」

三郎太、現れる。

もちろん、一同には見えない。

三郎太 『(独白) お前たちは忍者の風上にも置けぬ奴らだ。忍者同盟

連判状れんぱんじょうにおいて、伊賀の郷さとに許可なく先入するものあらば、こ

れを成敗するとの掟おきてがあるのを忘れたか……思い知らせてや

る！」

三郎太、三人に近づく。

お頭 「……霧隠れはもう、この部屋に居るかも知れぬ。油断をする

な！」

三人、間隔を置いて身構える。

お頭 「やい、霧隠れ……この娘と密書と引き換えだ。解つてるだろう

な！」

三郎太、お頭のお尻を蹴る。

お頭「痛てッ……そうか、これがお前の返事か！ 安兵衛 太郎丸  
娘を斬れ」

忍者 A、B 「……」

お頭「どうした、お前ら？ 娘を斬れと言ってるのが聞こえぬのか！  
出来ぬのか！ よし、ワシが斬り刻んでやる！」

お頭、小袖を斬ろうと刀を振りかぶる。

忍者 A、B 「お頭、斬っちゃ駄目！」

お頭「明るく、あいよ！ ……（舌打ちをして）お前らワシの性格  
を逆手に取りやがって……じゃ、霧隠れを始末しろ！」

忍者 A、B 「承知！」

三郎太、一同の隙を見て小袖の縄を解く。

暫時……見えない三郎太と棍棒を手にした小袖と忍者

たちとの戦い。

いつしか霧が薄れて行く。

お頭「おい、霧が消えて行くぞ……」

忍者 A 「あッ、お頭、霧隠れの姿が薄らと……」

忍者 B 「見えた、見えた！」

三郎太、何を思ったか、小袖の肩を両の手で掴むとくる  
りと反転して逃げ去る。（三郎太と小袖が入れ替わった  
のである）

お頭「……霧隠れが逃げたぞ、追え!!」

忍者 A、B 「待てーッ」

忍者 A、B、三郎太を追う。

お頭、小袖に近づき、

「娘、見たか霧隠れの本性を、何とまあ情けない奴、臆病風に  
吹かれ、逃げて行ったわ、はは、ははははははは」

小袖、いきなりお頭の頭上に棍棒を振り下ろす。

お頭「ウヌッ、はははは……」

と、お頭、倒れかかる

小袖「待て、倒れる前にワシの話を聞け！」

お頭「(素直に)はい」

小袖「わしは三郎太じゃ」

お頭「(素直に)嘘？」

小袖「ばかめ、これぞ変わり身の術。冥土めいどの土産に説明つきで見せて  
やったのだ」

お頭「驚き！」

お頭、倒れかかる。

小袖「お礼は」

お頭「(素直に)ありがとう」

小袖「倒れてよし！」

お頭「では、(ピョコッと、お辞儀をして)ウヌウヌウヌウヌ……」

お頭、ぐらぐらと崩れ落ちる。

小袖「成敗せいばい！」

三郎太(小袖)来る。

小袖「三郎太 おお、小袖が無事で何より」

三郎太(小袖)、いきなり小袖(三郎太)の胸い短刀を  
突き刺す。

小袖「(三郎太) ウツ、小袖！」

三郎太「(小袖) お師匠様……隙あり！」

三郎太と小袖、ぐるりと反転。

三郎太「で、でかした小袖……母の仇かたき……討うちとつたり」

三郎太、倒れる。

小袖、じつと三郎太を見つめていたが、

「さぶろーたー！」

完